

# 石巻・開成のより処 あがらいん 報告

2011年3月11日、東日本大震災が発災し、石巻市開成地区と隣接する南境地区に仮設住宅が建設されました（東日本大震災被災地最大の1,880戸）。同年8月に、開成仮設住宅の敷地内にグループホーム型の建物が建設され、その後、石巻市からCLCが受託を受けて2011年12月27日に「石巻・開成のより処 あがらいん」の運営がスタートしました。

石巻市内で被災者支援活動を行っていたことがきっかけで受託することとなりましたが、その背景には、CLCが仙台市内で緊急時に生活の場の提供と必要な課題に対応する「国見・千代田のより処 ひなたぼっこ」の経験を活かした運営を、という理由もありました。

「ひなたぼっこ」の活動は、緊急で自宅で暮らせなくなった人、たとえば自宅が火災に遭って焼け出されたという人、朝起きたら二人暮らしの父親が亡くなって取り残されていた知的障害の人など、さまざまな人に利用していただき、「ひなたぼっこ」でふたたび地域で暮らせるように生活を立て直して地域に帰っていく、という実践です。石巻市でも、「本人の望む暮らしに戻っていく」ことを前提としたグループホーム型の仮設住宅を運営することで、石巻市とその基本方針をたいせつに、活動を続けてきました。

たとえば、身辺自立のできているひとり暮らしの高齢の方が、生活に少し不安があるからと、グループホーム型の仮設住宅に暮らすと、そこに職員がいることでの安心感が生まれるでしょう。ですが、何年後かに仮設住宅がなくなったときに移り住むことを考えると、その人は支援者がいるところでなければ住めなくなってしまう、結果、特養の待機者になってしまうのではないか、と考えたのです。そうならないようにするために、困ったときには泊まれたり、必要な支援はするけれど、できるだけふだんは地域で暮らすことを目指してきました。

開成仮設住宅の閉鎖が決まり、2018年3月31日、「あがらいん」は7年余の活動を終わりました。皆さまからのご支援のもと、「あがらいん」の活動を続けてこられたことを感謝するとともに、活動の報告をさせていただきます。

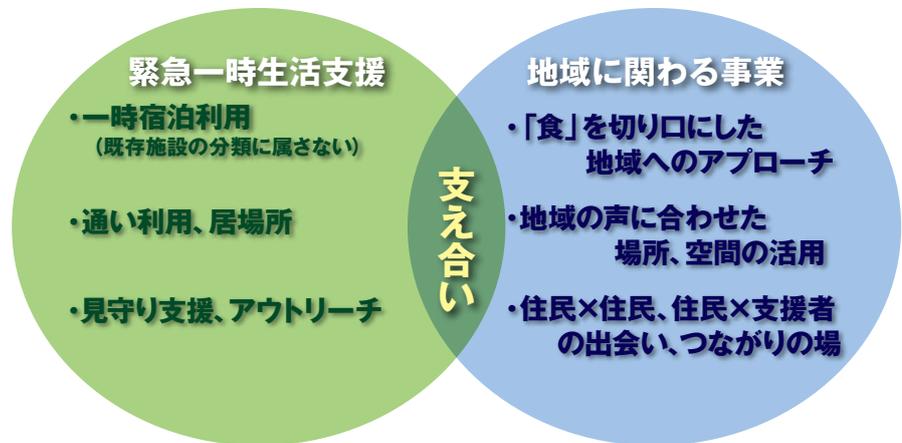
「あがらいん」は、制度外福祉住宅として運営をしてきました。被災3県に供給された福祉仮設住宅（グループホーム型仮設）のうち、「認知症高齢者グループホーム」は介護保険法に基づくものであり、「障害者ケアホーム、グループホーム」は障害者自立支援法（障害者総合支援法）に基づいて運営をされているものですが、それらから除いたものを制度外福祉住宅としています。「制度の対象者ではない、援護や支援が必要な被災者を対象に、住居と生活の支援を行うもの」と定義をしています。

石巻市との業務委託契約書では、福祉仮設住宅あがらいんの業務を「通常の仮設住宅での生活が困難で現行法でのサービス対応ができない被災者のため、また、多様なニーズに柔軟に対応するため、要援護者向けの福祉仮設住宅を管理運営する」「付随的事業…配食・サロン事業の展開」「備考…本件運営は、多様なニーズに対応する必要があるので、運営内容等について、本市（石巻市）と適宜、協議調整を図ることとする」としています。

「あがらいん」の事業は、「緊急一時生活支援」と「地域に関わる事業」という2つの柱があります。（図表1）

図表1

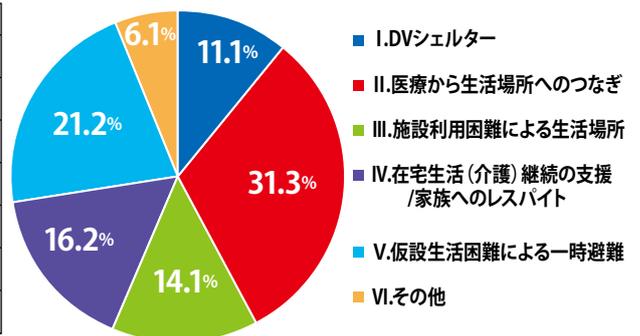
## あがらいん事業の2つの柱



図表2

## 宿泊利用にかかる相談件数

カテゴリー	宿泊利用	相談のみ	
I.DVシェルター	10	1	
II.医療から生活場所へのつなぎ	23	8	
III.施設利用困難による生活場所	7	7	
IV.在宅生活(介護)継続の支援/家族へのレスパイト	6	10	
V.仮設生活困難による一時避難	14	7	
VI.その他	0	6	
計	60	39	99



緊急一時生活支援は、一時宿泊を伴う支援のほか、通いの利用、居場所としての機能、見守り支援、アウトリーチなどを実施しています。利用にあたっては、地域包括支援センターや市立病院などの各支援機関のほか、本人や家族から、「あがらいん」または市役所の福祉総務課に宿泊の利用相談が

入ります。石巻市福祉総務課で聞き取りを行い、現行制度で対応ができるものは制度で対応してもらい、宿泊が必要と判断されたときは「あがらいん」の利用につながります。

宿泊利用にかかる相談件数は99件あり、うち60件が宿泊を伴う支援となり、39件は現行の制度サービス等で対

応しました。特徴的なのは、DVシェルターは相談件数11件のうち9割にあたる10件が、宿泊を伴う支援に至っています。また、5つの分類に属さない「その他」については、介護保険等の制度サービスで対応し、宿泊を伴う支援には至りませんでした。（図表2）

相談内容は、罹災や高齢に関するものが多く、ほかにはアルコール課題を持った人の宿泊を伴う支援の割合が高くなっています。また、40歳未満の若年層は、現行法での対応がほとんどで、宿泊を伴う支援にはあまり至りませんでした。

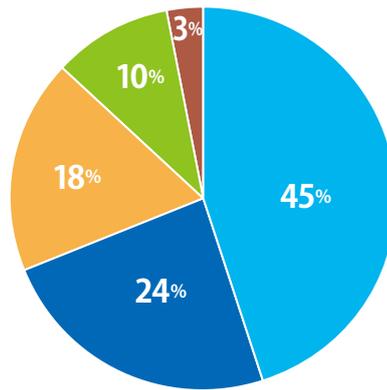
宿泊を伴う支援を受けた人のうちの約7割の方が、元の住まい、新たな住まいを含め、在宅にすることができています。（図表3）

地域に関わる事業は、「『食』を切り口にした地域へのアプローチ」「地域の声に合わせた場所、空間の活用」「住民×住民、住民×支援者の出会

図表3

## 宿泊利用終了後の居所

カテゴリー	相談のみ
在宅(元の住まい)	27
在宅(新たな住まい)	14
施設入所	11
入院	6
その他	2
計	60



■在宅(元の住まい) ■在宅(新たな住まい) ■施設入所 ■入院 ■その他

図表4

## 「食」を切り口にした地域へのアプローチ

### ◆地域食堂 毎週木曜日 11:30~14:00

	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	合計
開催回数	50	58	81	94	78	361
利用人数	1,804	1,682	1,700	1,700	1,123	8,009

※2015年10月より、金曜日も開催

※おもな利用者層：仮設住民、元仮設住民、支援者、NPO、周辺企業、ボランティア



### ◆惣菜販売車(キッチンカー) 毎週火・金曜日 11:00~13:00

	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	合計
開催回数	95	90	61	46	37	329
利用人数	775	1,075	788	486	281	3,405

※開成仮設、南境仮設、大森仮設、桃生仮設で運行。2015年10月より、火曜日のみ

※おもな利用者層：仮設住民、支援者



い、つながりの場」という活動を展開しました。

「『食』を切り口にした地域へのアプローチ」は、仮設住宅の住民や地域住民の出会いの場、つながる場のひとつ

として地域食堂を展開してきました。2013年からのべ361回、8、009人の方にご利用をいただきました。仮設住民、元仮設住民、支援者、NPO、周辺企業、ボランティアと

といった多様な人たちが、ここでテーブルを囲み、食事をされました。

食堂に来てつらい方にはこちらから出向いていこうと、キッチンカーで惣菜の移動販売を行いました。惣菜の

販売だけでなく居場所になるようにと考え、お茶飲みができる場所をつくるなど、居場所の機能も果たしてきました。

「地域の声に合わせて場所、空間の活用」は、定期サロンやイベントを企画・実施し、「あがらいん」の宿泊利用者、地域住民など、いろいろな方が交流をしたりつどったりして過ごす場づくりを行ってきました。また、他団体に場所を使ってもらい、共催するサロン・イベントを開催してきました。(図表5、6)

「あがらいんと地域の接点には、非常に多くのものがあります。こうしたいろいろなテーマ・カテゴリーにかかわらず、宿泊の利用者だけでなく、仮設住宅の住民、いろいろな関係団体と出会い、まじわることで、次のステップにつながっていきました。



仮設住宅の支えあいを共有するワークショップ

「住民×住民、住民×支援者の出会い、つながりの場」など、いろいろな出会い、つながりの場をつくることで、いろいろなことを共有していく場ができました。たとえば、仮設住宅の支え合いを共有するワークショップを開催したり、地域に入っている支援者も一緒にマップづくりをしました。あがらいんの活動が新たな展開を生んできました。

図表5

## 地域の声に合わせた場所、空間の活用

### あがらいん企画の定期サロン・イベント

イベント名	開催期間	開催日	主な参加者
編み物サロン	2014年1月～ 2015年12月	毎週 月曜日	仮設住民、 宿泊利用者
食事づくりサロン	2016年4月～ 2018年1月	月1回	仮設住民、 元仮設住民
外出サロン	2011年10月～ 2018年11月	年2回 程度	仮設住民、 元仮設住民、 宿泊利用者
健康☆体操	2014年4月～ 2017年10月	月1回	仮設住民、 元仮設住民、 宿泊利用者
カラオケサロン	2013年5月～ 2018年1月	毎週 土曜日	仮設住民、 元仮設住民、 宿泊利用者



外出サロン「お花見」

図表6

## 地域の声に合わせた場所、空間の活用

### 他団体主催の定期サロン・イベント

イベント名	開催期間	開催日	主な参加者
ボンボンカフェ	2013年4月～ H30年1月	毎週水曜日	乳幼児子育て期の 母親と子ども
森の子ども学習室	2012年10月～ 2014年12月	毎週土曜日	仮設住宅の小学生
ゆびヨガサロン	2016年8月～ 2018年1月	月1回	興味のある方
AAミーティング	2014年3月～ 2018年1月	月1回	アルコール依存症 当事者
足つぼサロン	2014年4月～ 2017年4月	月1回	興味のある方
アロマセラピー	2012年7月～ 2016年3月	月1回	仮設住民、 宿泊利用者
ともいき農園	2017年6月～ 2018年1月	毎週木曜日	共生地域創造財団で 支援している方



ともいき農園

森の子ども  
学習室

ボンボンカフェ

## あがらいんと地域の接点

市立病院仮診療所、地域包括支援センター、  
生活支援員、地域福祉コーディネーター、  
保健師等との連携  
休日・夜間の個別支援  
開成支援者のテーブル  
食堂の調理や  
運営の補助、  
施設の修繕・  
木工製品の製作・販売  
出張理容  
フレッシュあがらいん  
(八百屋)の営業  
駄菓子屋「あがらいん」  
の営業  
地域通貨  
「あがらYEN」発行



「あがらいん」の利用者には、こ  
で暮らしの願いを叶えるのではなく、その人  
の暮らしの願いを叶えることに力を注  
いできました。一時宿泊を伴う利用と  
は、長期利用に移行するためのもので  
はなく、安心して地域でもう一度暮ら

すために必要な支援と考えてきまし  
た。また、「あがらいん」を退去したら  
そこで関係が切れるのではなく、「地  
域に関わる事業」にまでもらうこと  
で、ゆるやかなつながりを続けること

ができました。制度に乗せるのではな  
く、地域での暮らしを継続していくた  
めの支援を心がけ、「あがらいん」の職  
員だけでなく、地域の人たちにも出  
入りをしてもらい、地域のイベントに  
参加したり、地域の人と触れ合うこと

から、もう一度地域に帰っていくお手  
伝いができたのではないかと思います。  
す。  
(この報告は、2018年2月25日、石巻専修大  
学で開催した「石巻・開成のよりあがらいん活  
動報告会」をもとに作成しています。本文中の  
データや表記は2018年1月31日時点のものとな  
ります)

## 緊急一時生活支援から地域生活に戻る支援へ

75歳の女性Aさんとのかわりには、DVシェルターとしての活用が始まりました。DV被害による一時避難、生活力の回復、家族へのレスパイトを目的に、215日の利用がありました。最初の宿泊利用を開始したときは、抑うつ状態で非常に心身<sup>こうちやく</sup>膠着をしていました。これからまた新たに自分で暮らすために家事などの生活力を取り戻すことを目標に、生活リズムや体調を整えながら、食事づくり、掃除、洗濯など、「あがらいん」の中の業務をお手伝いいただきました。また、Aさんの場合は、ほかの利用者や食堂などに来る住民との交流も大きな効果がありました。

仮設住宅での暮らしをスタートされましたが、「あがらいん」に通いながら、またはボランティアをしながら地域の中で生活をしておられました。

しかし、その後しばらくしてから病気が発覚し、精神的に落ち込む日が多く、健康不安もありました。入院前後の精神的な不安定を支えるために一時生活支援を利用、結果として計4回、237日利用されました。

現在はまた自宅に戻り、仮設住宅での暮らしを継続されています。「あがらいん」にボランティアに通ってきてくれたり、姿が見られないことが続くときはスタッフが電話をして体調などを聞いたりしながら、復興住宅への入居のための準備をされています。



## 本人の暮らしたい暮らしに戻る

62歳の男性Bさんは、片下肢切断により車イス利用をしています。利用開始時よりアルコールについての課題があり、1,054日の利用となっています。

仮設住宅は車イス対応ではないため、退院後、次の生活場所を考え、確保し、転居するまでの一時的な居場所として利用を開始されました。

宿泊利用の開始当初は、下肢切断という現実と向き合っていたきつつ、その後の生活スタイルは在宅も視野に入れた支援を開始しました。入浴ヘルパーや訪問リハビリなど、必要な制度サービスはきちんと使いつつ、「役割のある暮らし」を1つの目標としました。たとえば、地域食堂に付随した八百屋の店番や、駄菓子屋の運営など、Bさんができることをしながら他者とのかわりをつくっていききました。

当初は、将来を考えても「あがらいんのあとは施設しかないのかな」と漏らしていましたが、「自分が生まれ育った浜を見に連れて行ってほしい」と言われ、お連れしたところ、「いまの体の状態でできるかどうかはわからないけれど、またこんな暮らしをしたい」とつぶやかれました。

Bさんは、「復興住宅で暮らしたい」という選択をされ、申し込みをし、当選をしました。復興住宅が完成するまで「あがらいん」を利用しながら、転居後もスムーズにサービスを利用できるように、デイサービスなどを利用し、関係づくりを始めました。

復興住宅に入居されたあとも、月1～2回程度ふらっと顔を出されてカラオケサロンに参加されたり食堂の食事をとられたり、つながりが継続しています。

## 地域に関わる事業で気になる人の暮らしを考える

71歳の男性Cさんは、仮設住宅でひとり暮らしをしています。仮設住宅の健康調査によると、日中から飲酒をしているなど、支援者のなかでも少し気になる存在でした。

Cさんとの出会いは、総菜の移動販売をするキッチンカーでした。キッチンカーの常連となり、地域食堂にも来てくれるようになりました。その後、「あがらいん」がCさんにとっての日中の居場所になっていきました。

支援者だけでなく、仮設住民、地域住民ともつながりができ、車を手に入れて、「買い物につきあってあげるよ」と送迎をしてくれたり、「あがらいん」の予定表を配付してくれるなどのお手伝いをいただいています。

復興住宅に転居してからも、月に20日ほど通ってくれています。健康状態などから、少し気になる人ではあるのですが、違う切り口で見ると、いろいろな力を持っている人でもあります。Cさんのような方を、新しい地域や暮らしの場に紡いでいくことも必要な役割だと考えています。

